浮世親仁形気（うきよおやじかたぎ）

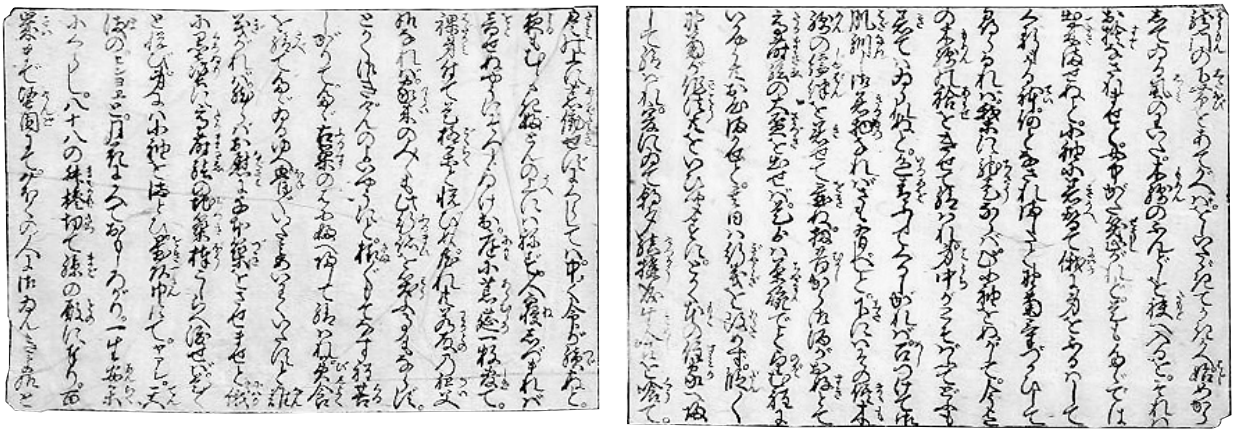
横本５巻５冊
鶯のはつ子の日、作者江嶋其磧・八文字自笑自序。
享保五年（1720）正月、八文字屋八左衛門・ゑじま屋一良左衛門　刊。
（岡谷文庫　913.52/E）

（巻５の３「老を楽しむ果報親父」14ウ・15オ）

『世間子息気質』『世間娘気質』に続く、江島其磧作の気質物。15の短編からなる。力自慢で相撲に凝る親父、子供自慢で張り合う親父、いかさま医者にだまされ高額な寿命薬を買わされる吝嗇家の親父、兵法に凝る刀屋の親父など、さまざまな一風変わったオヤジの性癖を「気質」として誇張し、こっけいに描く。

挿絵は
右：酒盛が果てた後、灯籠を降ろす野菊は、家老に見初められます。
中：若殿のおじい様、奥様の親御様としてお屋敷に呼び寄せられる又兵衛。再会をなつかしむ野菊ですが、立派になった娘に、又兵衛はなかなか気づきません。
左：豪華な布団では眠れず、庭にムシロをひいて裸で横になり、「これが極楽」と御満悦の又兵衛。

画中詞は右から順に
「女房がふうに其まゝじや」「だんな様はづかしい」
「是はどうでござります」「あれへござりませ」「よほどな年じや」
「おなつかしやおなつかしや」
「おぢいさまじやはいの」「何人ぞいの」
「是は是は」「是がごくらく」



（巻５の３「老を楽しむ果報親父」17ウ・18オ）

翻刻

・・・龍門の下帯をあてがへば、をしいたゞきてかきかへ、始めからしてゐる虱のわいた木綿のふんどしを袂へ入るを、「それはお捨なされませ」と、女中がた笑止がれど、「是もたゞでは出来ませぬ」と、小袖に着替て俄に身をふるはしてくるしがる躰。「何となされました」と、野菊気づかひして尋らるれば、「我等に馳走ならば、此小袖をぬがして、今迄の木綿の袷をきせて給はれ。身中がこそばふてどふも着てはゐられぬ」と、色青ふしてくるしがれば、召つけて御肌馴し御着物なればさも有べしと、下にはその侭木綿の襦袢を着せて置ぬ。扨、昔から御酒がお好とて高蒔絵の大盃を出せば、「是よりは茶碗で」と、望む程にいかやう共お心まかせと、其日は行義を改めず。段々、野菊が作法共をいひ聞すに、「とかく本の住家へ帰して給はれ。爰にゐて朝夕結構成生食を喰て、畳の上に荒働せずにくらしては、中々命が続かぬ」と、夜もむらさきぶとんの上にはねず、人寝しづまれば音せぬやうにそつとぬけ出、庭に荒莚一枚敷て、裸身付て是極楽と悦びぬ。然れ共若殿の祖父様なれば、家来の人々も此行跡を笑ふ事もならず、とかく御きげんのよいやうにと、様々もてなす程苦しがりて、「たゞ古巣のはにふへ帰して給はれ。美食を給てたゞゐるゆへ、骨々いたみめいわくいたす」と難義がれば、「然らばお慰に千本築（農作業の様子を組み入れたユニークな踊り）をさせませ」と、俄に黒塗に高蒔絵の地築棒こしらへ渡せば、「是々」と悦び、身には小袖をまとひ、置頭巾にて、「ヤアレ、天満の、ヒンヨヱ」と、月花にかへておもしろがり、一生安楽にくらし、八十八の升掻切て孫の殿に奉り、百歳まで堅固にて、おほくの人に御ゐんきよ様と・・・

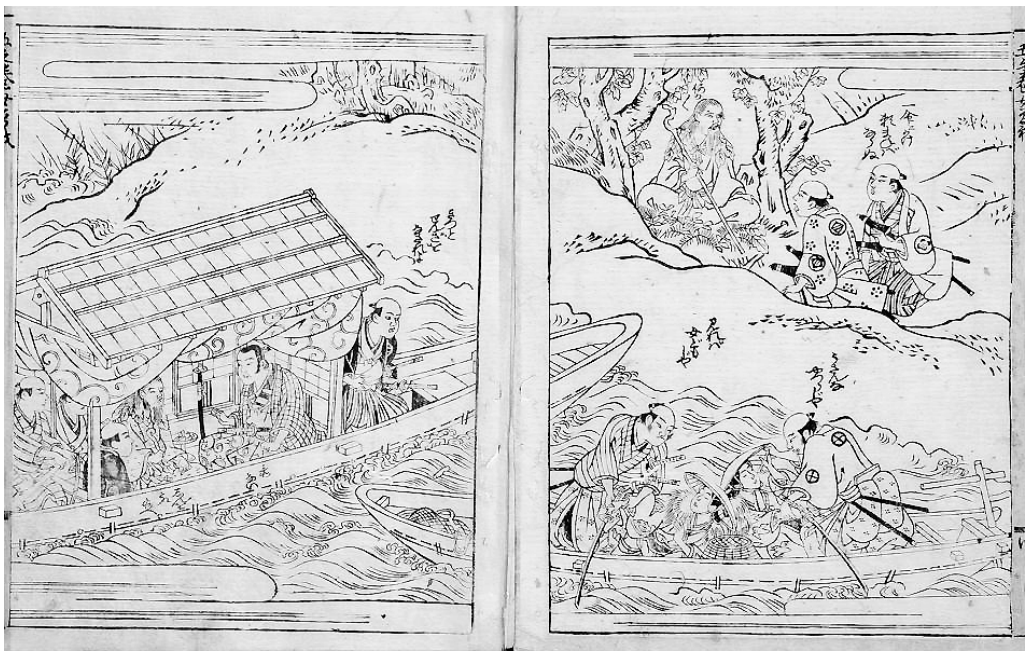
話の大意

（中椀の又兵衛という貧乏ながら実直な親父がおりました。器量よしとは言えぬ一人娘がひょんなことから玉の輿に乗り、大名の御家老の奥方となって世継の若殿を生みます。家老の邸宅に奥方の親御様として迎えられる又兵衛ですが・・・）着慣れぬ着物に青くなって苦しがり、盃に酒を注げば茶碗で飲みたいと所望します。ふかふかの布団では寝つけぬと、庭先にムシロを敷いてこれが極楽と御満悦。果ては、何もしないでただ御馳走を食べてばかりでは骨が痛むと難儀がる始末。困りはてた家来が、気晴らしにと勧めた千本築を大いに気に入り、百の年まで御隠居さまとかしずかれ、一生安楽に暮らしたという果報者の親父でありました。

（堀）

〈新板絵入〉女曽我兄弟鑑（おんなそがきょうだいかがみ）

大本５巻５冊（巻３一部欠）
めでたい年の始、作者自笑・作者其磧自序。
享保六年（1721）正月、八文字屋八左衛門・江嶋屋一郎左衛門　刊。
（岡谷文庫　913.52/H）

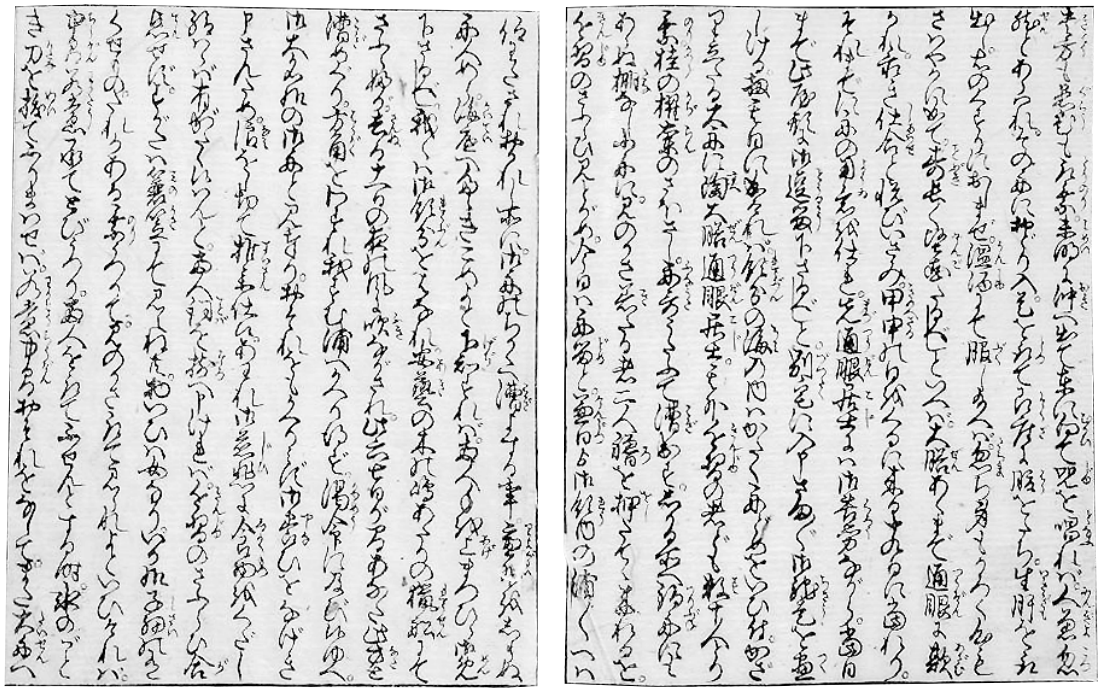


（巻５の２「謀はおもふ図にのつて来る大船」８ウ・９オ）

周防の国（今の山口県）の大名、大内義隆は家老の陶（大膳）晴賢に謀られて打ち滅ぼされ、義隆の一子、義丸君を守り育てていた妻籠勘介も陶の家来に切り捨てられる。勘介の娘の千どり（朝倉）とおてふ（八千代）の姉妹は、それぞれの亭主の協力もあって、共に力を合わせて親の敵討をする。また、陶は主君の仇でもあることから夫婦４人は先代の旧臣達と敵討を計画し、陶が不老不死の薬を求めていることを知り、策略をめぐらして船上にて見事、仇討を果たす。その後は義丸君の世となって、めでたし、めでたし。

挿絵は
右　　上：山奥に住む仙人といわれる通眼居士を探し訪ね、不老不死の薬法の教えを請うている。
他の部分：大きい船には陶晴賢と通眼居士、小舟には蓑笠をかぶった千どり（朝倉）とおてふ（八千代）が刀を振り回している。

画中詞は右から順に
「一命にかけ頼まねばならぬ」
「うさんなやつらじや」「見れば女どもじや」「何か、何か」「きつとせんぎをなされよ」
「忝（かたじけ）ない」「しんを取給へ」



（巻５の２「謀はおもふ図にのつて来る大船」８ウ・９オ）

翻刻

・・・貴方も愚老も取乗、未明に沖へ出て東に向て、呪を唱れば、人魚忽然とあらはれ、その舟におどり入、是を取て即座に腹をたち、生胆を取出し、右のくすりにおしまぜ、温酒にて服し給へば、忽ち身もかろく心もさはやかに成て、寿長く堅固たるべし」といへば、大膳あくまで通眼に欺かれ、「忝き仕合」と悦びいさみ、甲申の日をくるに、来る十九日に当れり。「それまでに舟の用意を仕れ。先、通眼居士には御苦労ながら、当日まで此屋形に御逗留下さるべし」と、別宅に入申、さまざま御馳走を尽しける。扨、其日に成ければ、領分の海の内はかたく舟どめをいひ付、かざり立たる大舟に陶大膳、通眼居士、其外近習の者ども数十人とり乗、桂の櫂、蘭のさほさし、舟歌うたふて漕出す。しかる所へ釣舟にもあらぬ棚なし小舟に、みのかさ着たる者二人艪を押したてゝ来れるを、近習のさぶらひ見とがめ、「今日は舟留と、兼日（前日）より御領内の浦々へは仰わたされおかれし所に、御舟のちかくへ漕よする事、慮外をしらぬ舟人めら。海底へたゝきこめよ」と下知すれば、両人手を上、「まつぴら御免下さるべし。我々は御領分をはなれ、安芸の木の嶋あたりの猟船にてさふらふが、去る十一日の夜の風に吹ながされ、此六七日が間、あなた此方と漕めぐり、方角をわすれ我すむ浦へかへり得ず、渇命（飢えと渇き）に及び候ゆへ、御大名様の御舟と見奉り、おそれをもかへりみず、御養ひをなげき申さんため、浪をし切て推参仕候。あわれ御慈悲に食物をくだし給はらば有がたく候はん」と、両人詞を揃へ申ければ、近習のさぶらひ合点せず、「すがたは蓑笠にて見えね共、物いひは女なり。いか様子細の有くせもの。たれかある、乗うつりて、みのかさ取て見られよ」といひければ、中間若党承てとびうつり、両人を取てふせんとする時、氷のごとき刀を抜てふりまはせば、若党中間おそれをなして、また大舟へ・・・

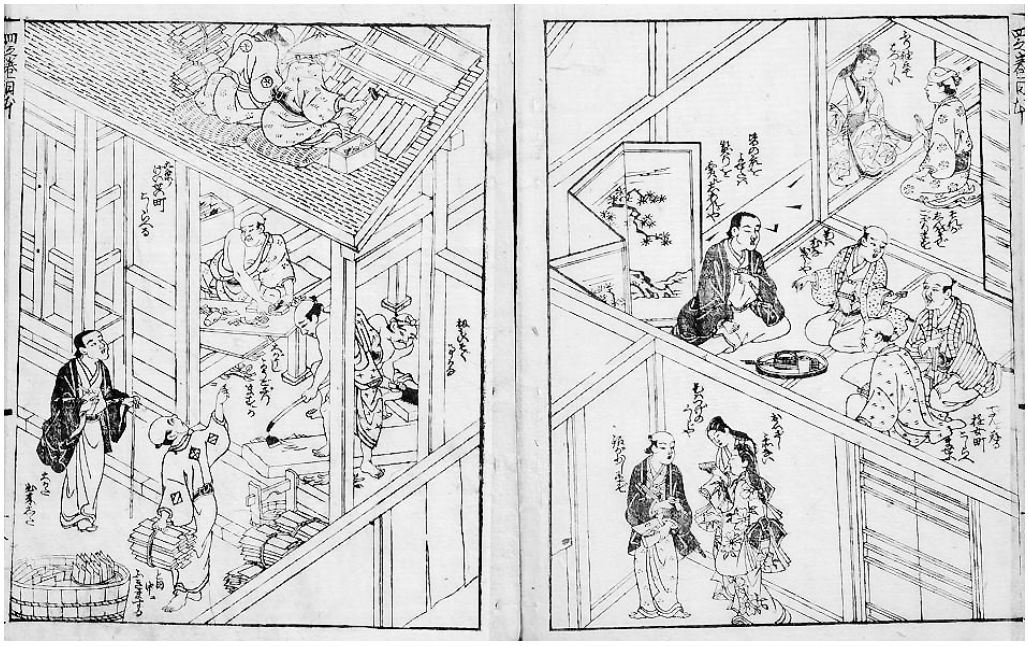
話の大意

陶晴賢と通眼居士が船に乗って、不老不死の薬に必要な人魚の生胆を探しています。そのとき、２人乗りの小さな舟が近寄ってきます。みると蓑笠を着ているが、話し振りは女らしい様子です。「くせものよ」と取り押さえようとすれば２人は刀を抜いて向かってきます。

（髙橋）

〈新板絵入〉日本契情始（にっぽんけいせいのはじまり）

大本５巻５冊
栄ゆく花の三月、作者自笑・作者其磧自序。
享保六年（1721）三月、江島屋一良左衛門・八もんじや八左衛門　刊。
（岡谷文庫　913.52/H）

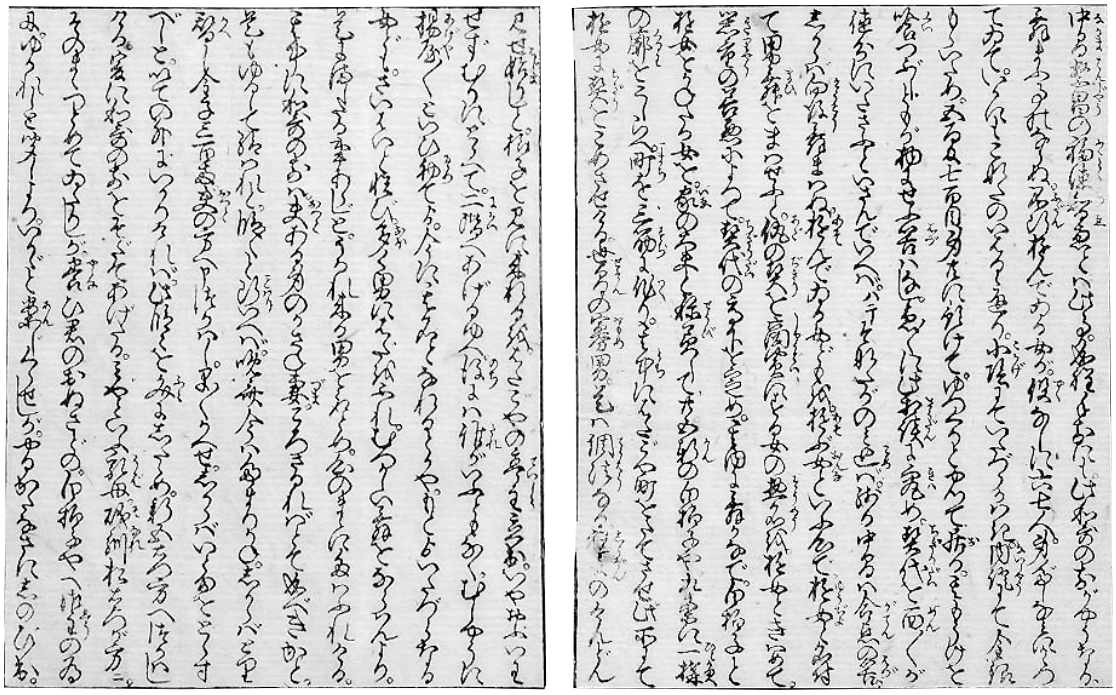


（巻４の１「寡男は聞伝に金銀持て廓の始」４ウ・５オ）

鳥羽の院にとりついた妖狐を退治した三浦ノ介義孝が、宮中から千歳を妻に与えられるというところから物語りは始まる。元白拍子の千歳は以前から義孝の弟、和田五郎と夫婦の約束をしていた。五郎は家のため、兄のためを考えて二人の関係を断ち切ろうとするが不首尾に終わる。五郎は自ら不行跡を起して、兄から勘当され、国を追われることに成る。この兄弟間の義理と人情の世界に、遊女となって主に尽くす和歌の前を登場させて、遊郭の成り立ちと、「くるわ」における微妙な男女の関係を描きつつ、兄弟の仲を円満に解決し、五郎と千歳が結ばれるという話。

挿絵は
右上：白拍子仲間が新商売の遊郭を作る話をしている。隣の部屋では300両の金の為に遊女となった和歌の前が訪ねて来た乳母のみやと今の身の上を嘆きあっている。
右下：他の遊女たちがお客にかんざしや櫛をねだっている。
左　：九条に急いで遊郭を作る様子を描いている。これは「はたごや」であろうか。

画中詞は右から順に
「一だんに存る遊女町こしらへませふ」「それがしんぼうでござります」
「ふり袖きてはづかしい」「これは尤（もっとも）な義じや」「お心ざし忝（かたじけ）ない」「皆の衆をよせたは契りを売るしあんじや」
「是はつげのくしじや」「銭が少し有ぞ」
「扨（さて）もいそぐ事かな」「大がうしようございますか」「今日中にふきまする」
「九条ノけいせい町こしらへる」「大かた出来した」



（巻４の１「寡男は聞伝に金銀持て廓の始」６ウ・７オ）

翻刻

・・・中間繁昌の福徳智恵とは此事。成程手前にも、此和歌の前がやうなる舞まふ事のならぬ、不断遊んでゐる女が、役なしに六七人、身だしなみにかゝつてゐて、いかにもこなたのいはるゝ通り、小陰にていたづらかはき。内証にて金銀もらいため、五百匁七百目、身共に預けて、ゆつくりとやつて居る。其もうけを喰つぶしどもが物にせふ筈はなし。急々に此相談に究め、契代を面々が徳分にいたさふ」と、いさんでいへば、「ハテそなたがのみ込ば、残る中間は合点の筈。しからば向後舞まはぬ、遊んでゐる女どもを、遊ぶ女といふ心で、遊女と名付て男舞をまはせふ」と、仇の契を商買にする女の惣名（総称）を、遊女ときはめて、器量の善悪によつて、契代の高下を定め、其内に舞かなで、白拍子と遊女をかねたる女を、家の大夫と称美（ほめる）して、廿五軒の白拍子や、九条に一構の廓をこしらへ、町を三筋に作り、其中にはたごや町をたてさせ、此所にて遊女に契をこめさせける。世間の寡男、「是は調法なる、祝言のけんどん見せ始りし」と、様子を見に来れるを、はたごやの亭主立出、いやおふいわせずむりにとらへて、二階へあげるゆへ、後には誰がいふともなく、むしやうに揚屋揚屋といひ初てより、今に其名となれるとかや。もとよりいたづらなる女ども、さいはいと悦び、多く男にはだをふれ、むつかしい舞をならはんより、是にましたる事あらじと、うかれ来る男を取とめ、心のまゝにたはぶれける。其中に和歌の前は、夫ある身のかさね妻（夫のある妻が別の男と契ること）、ころさるればとて成べきかと、「是もゆるして給はれ」と、段々と断いへば、晩斎今はたまりかね、「しからば、とり替し金子三百両、夫の方へ申つかはし、早々かへせ。しからばいとまをとらすべし」と、以ての外にいかりければ、此段々を文にしたゝめ、新五右衛門方へつかはしける。爰に和歌の前をそだてあげたる、みやといふ乳母、磯馴松右衛門が方に、そのまゝつとめてゐたりしが。養ひ君のおぬさどの、白拍子やへ御主の為に、ゆかれしと聞しより、いかゞと案じくらせしが。やるかたなさにしのび出・・・

話の大意

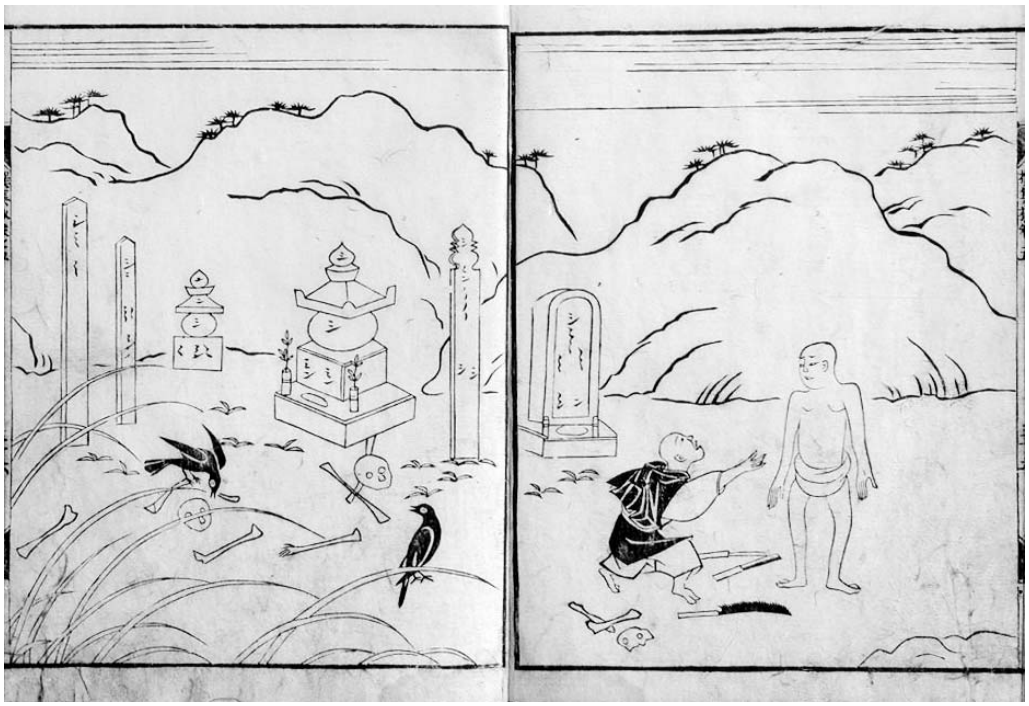
白拍子屋仲間が集まって、遊郭を作り上げていく話がますます盛り上がっています。一方では和歌の前と乳母みやの嘆きの話が語られていきます。当時は舞をまい、小歌をうたう美人を白拍子といい、美人でありながら舞のまえない女を黒拍子と呼んでいました。そのような何もしないで「遊んでいる女」が男性と仮の契りを結ぶ遊女に発展し、白拍子と遊女を兼ねる美人が太夫となっていきます。彼女たちを商品として新しい商売を確立し、遊廓という一つの町を形成していく過程が、こじつけ交じりに描かれています。

（高橋）

参　考

「挿絵画家、西鶴」

『西行撰集抄』　半紙本９巻合５冊（小林文庫　913.41/Sa）



西鶴は器用な人で、絵をよくした。絵俳書、俳諧の自画賛、それから処女作『好色一代男』をはじめとする自作の浮世草子のうちのいくつかに、ユニークな絵を残した。この『西行撰集抄』の挿絵も、独特の画風から西鶴の手になるものと推定される。

『撰集抄』は西行に仮託された中世の説話集で、江戸時代には西行の作と信じられた。西鶴同世代の芭蕉の愛読書でもあった。掲出の図版は、西行が高野山で死者の骨から人造人間を作るという不思議な話。その他の挿絵の中には、西鶴と同時代の風俗で描いたものが見られる。そのことは、古典を過去のものとして突き放すのではなく、何かしら同時代的な文学として享受していたことを如実に物語っている。

本書は貞享４年（1687）５月、大阪の河内屋善兵衛という版元から刊行された。この河内屋は『往生要集』（貞享２）・『小学句読』（貞享２）・『科註妙法蓮華経』（貞享３）・『盂蘭盆経疏新記』（貞享３）・『平家物語』（貞享３）・『近代艶隠者』（貞享３）の刊行書が知られるが、このうち『近代艶隠者』は西鶴門人西鷺の作で、本文の版下も挿絵も西鶴が書き与えている。西鶴と親しい版元であったらしい。

実は大阪の出版の歴史は浅く、始まってからこの時点でまだ十数年しか経ていない。出版のメッカ京都に比べてひどく劣勢であった。それがこの時期、京都に対抗するかのように、『太平記』『平家物語』『沙石集』等々、過去に京都で刊行された古典類が盛んに大阪で刊行される。この『撰集抄』大阪版の背景にもその流れがある。

ところが結局、大阪の地での古典刊行は成功しなかった。そして、大阪の出版界は新作の実用書および西鶴本を軸に発展するに至るのである。そのように、大阪の出版界の動向と西鶴とは密接な関係にあった。

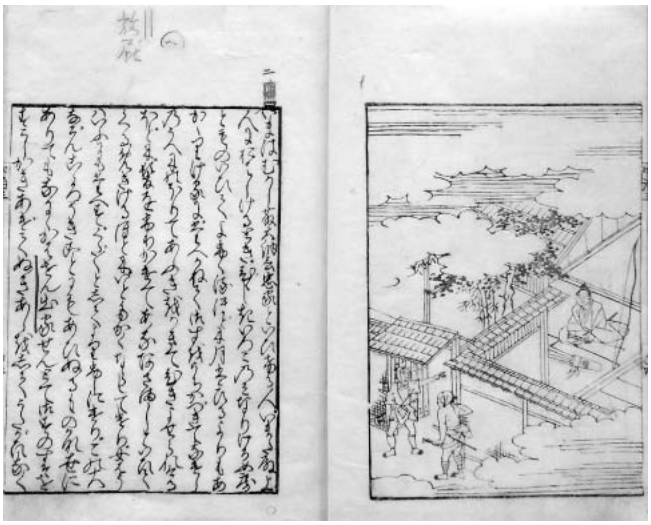
（塩村）

2）書物は語る

前近代の古書の魅力は、一つ一つの顔が違っていることにある。写本はもちろんのこと、刊本であっても、一度に刷られる部数が少なかったために、全く同じ書誌的特徴を備えた本というのは滅多にない。本そのものに加え、書き入れや伝来など、その本を過去に享受した人々の痕跡も、時に多くを語ってくれる。

【1】書き入れ（識語）は語る

①『宇治拾遺物語』　刊本　半紙本15冊（小林文庫　913.41/U）



万治２年（1659）、林和泉掾（洛陽今出川書堂）刊の流布刊本。「物集家図書印」の印記あり、明治の国文学者で東京帝国大学教授、個人の力で百科事典『広文庫』の編纂を成し遂げた物集高見（1847－1928）の旧蔵書。随所に朱の傍線や見出しが書き込まれており、『広文庫』の編纂に使用された本である。このような書き入れを施すためには、古書を入手することが必要で、その結果、物集家は経済的に窮地に追い込まれた。『広文庫』の姉妹編『群書索引』の自序によれば、「笞執る債鬼」が家具や調度を押収、さらに数万の蔵書に封印を施し競売に付そうとしたという。その状況を「誰れか今日を文明なりと謂ふ、文明の日、豈にかゝる醜類を生ぜんや」と悲痛の念を吐露している。

なお、本書には外に「晶子」の蔵書印もあり、後に歌人の与謝野晶子の所蔵に帰したことが知られる。

②『つれづれ草拾遺』　刊本　半紙本１冊（神宮皇学館文庫　914.45/T）

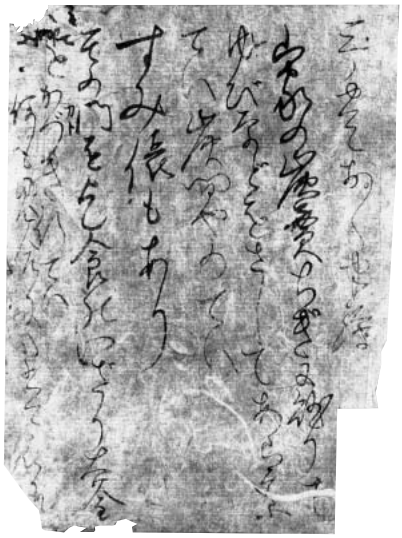
朗如著、徒然草をまねた和文随筆で、寛保４年（1744）孟春奥。江戸時代後期の戯作者、式亭三馬の旧蔵書入本で、自筆識語「県居翁の跋ありて殊に秘蔵せり」（見返）、「文化十とせといふとしの菊月むしばみたるをつくろはせ表装を補ひ家にをさむ（朱印「三」「馬」）」（巻末）とある。本文に丁寧な虫直し補修があり、昔の人が書物をいかに大切にしたかが知られる。印記「式亭」「尚古斎所蔵」「擁書楼千葉氏珍蔵記」「千葉文庫」。

【2】表紙裏からの贈り物

①『〈官職〉田舎弁疑』

刊本　半紙本４巻合２冊（神宮皇学館文庫　210.09/Ka）

北京散人宵雨軒、すなわち浮世草子作家、月尋堂著の有職故実解説書。宝永８年（1711）季春、須原屋茂兵衛（江戸日本橋南一町）・橘屋次兵衛（京三条大和大路）刊。名古屋大学神宮皇学館文庫本書誌調査の過程で、その２冊目後表紙の裏面に、次の反古が貼り付けられているのに気付いた（写真は裏焼き）。



三ノ巻おく半絵
山家の炭売ちぎに懸りて
ゆびなどをさしてあらそふ
てい炭問やのてい
すみ俵もあり
その門を乞食のいざり大釜
をかづき行てい
　　何も見合に御書可被下候

版元から出た反古で、一読、絵師に描いてもらう本の挿画の絵組について、おそらく作者が版元に指示した書面と思われる。そして、これに相当する挿画をもつ本が、たまたま名古屋大学に所蔵されていた。『鎌倉比事』がそれである。

②『鎌倉比事』

刊本　大本６巻６冊（うち巻６欠）（岡谷文庫　913.52/G）

月尋堂作の浮世草子で、宝永５年（1708）３月、橘屋次兵衛（洛東大和大路）刊。西鶴の『本朝桜陰比事』にならった裁判小説で、その巻３の６「男は裸十六貫目」の挿画である。ちなみに、指示書後半の「乞食」云々は、巻３の８「思ひよらぬ力こぶ」に相当する場面があり、別章の挿画を１図の中に描くことが異例なので、これは採用されなかったのだろう。

浮世草子の挿画指示書というのは、恐らくこれ以外には知られていないのではなかろうか。これにより、極めて大ざっぱな指示で挿画が出来たことがわかる、貴重な資料である。

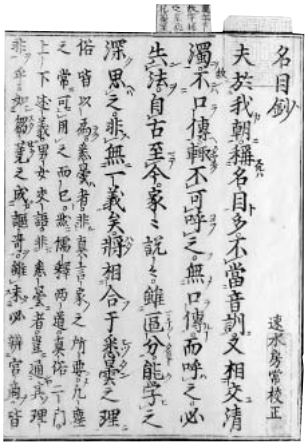
【3】御師（おし）の学芸―その１

名古屋大学神宮皇学館文庫は、神宮御師であった来田家の旧蔵資料を中核としている。御師は全国に顧客（旦那場）を持ち、江戸時代になって急速に一般に広がった伊勢信仰の仲介役を果たした。彼らの活動は空間や階層を超えた広がりをもっており、その中から学問や文学の方面においても特異な活躍を見せる者もいた。来田家の人々はことに学芸に熱心で、その旧蔵資料は御師の活動を考える上で貴重な資料となっている。

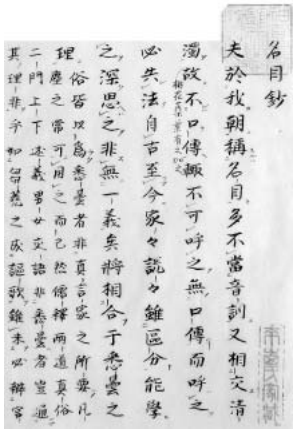
ここに取り上げたのは、江戸時代中期の人、来田（藤原）有親（初名、親岑）が京都の有職故実家、速水房常に学んだことを跡付ける資料である。

①『名目鈔』（原題簽「禁中名目鈔」）
刊本　大本１冊
（神宮皇学館文庫　210.09/To）

②『名目鈔』
刊本　大本１冊
（同　210.09/To）



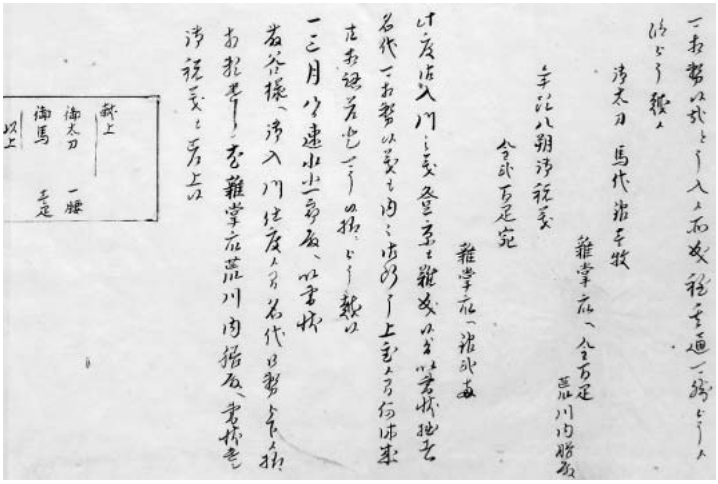
③『官職名目鈔纂考』
写本　大本８冊
（同　210.09/Y）



洞院実凞著の有職故実書。①は近世初期、洛陽林和泉掾時元刊の流布刊本で、寛保３年（1743）に来田氏が、速水房常所持本に基づいて、朱書で校訂を書き入れた本。いっぽう、②は①の板木に入木（いれぎ）でもって一部改刻を施した、近世中期後印本で、速水房常による校訂本である。改刻漏れを来田氏が朱書で補っている。

③は『名目鈔』の詳細な注釈書。速水房常自筆稿本を来田氏が書写した本。寛保２年（1742）速水氏元奥書あり。

④『藤谷家御教訓』　　写本　大本１冊（神宮皇学館文庫　911.107/To）

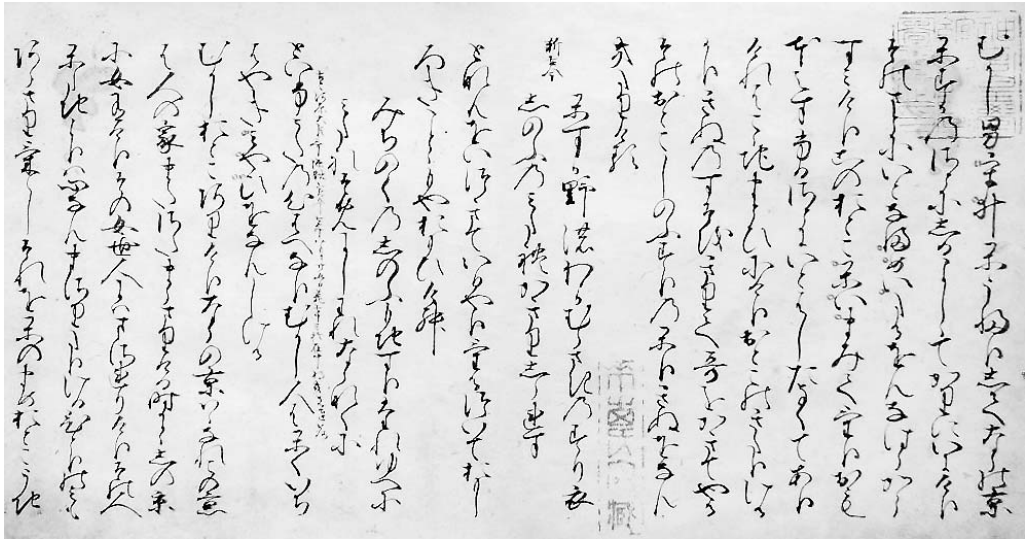


宝暦４年（1754）３月、来田氏が速水房常（小一郎）を介して、公家の藤谷前宰相（為香）に入門した際の諸記録。その後の和歌添削指導の記録を含む。なお、入門時の献上物は、馬代銀一枚、太刀代銀１両、雑掌衆へ金100疋。

【4】御師の学芸―その２

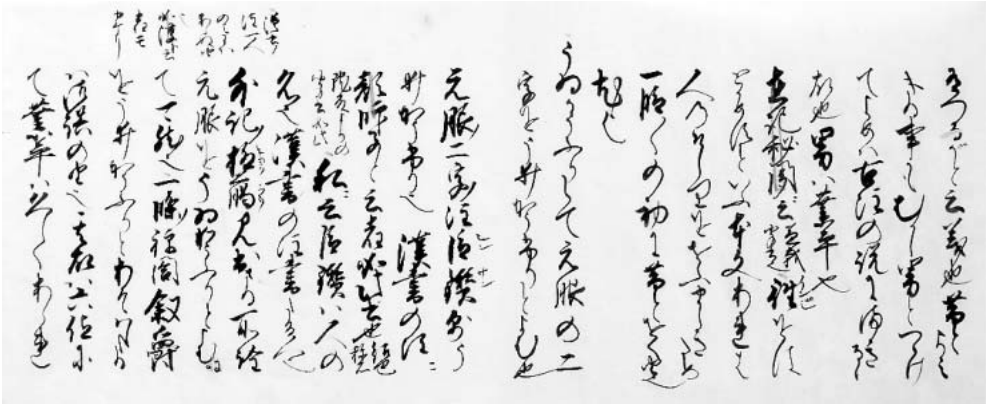
来田家旧蔵資料の中には、伊勢物語及び連歌関係に貴重資料が多い。前者も連歌師に関わる資料が多く、伊勢の人々の学芸に連歌師が関与したことが知られる。

①『伊勢物語』　　写本　枡形本列帖装１帖（神宮皇学館文庫　913.32/I）



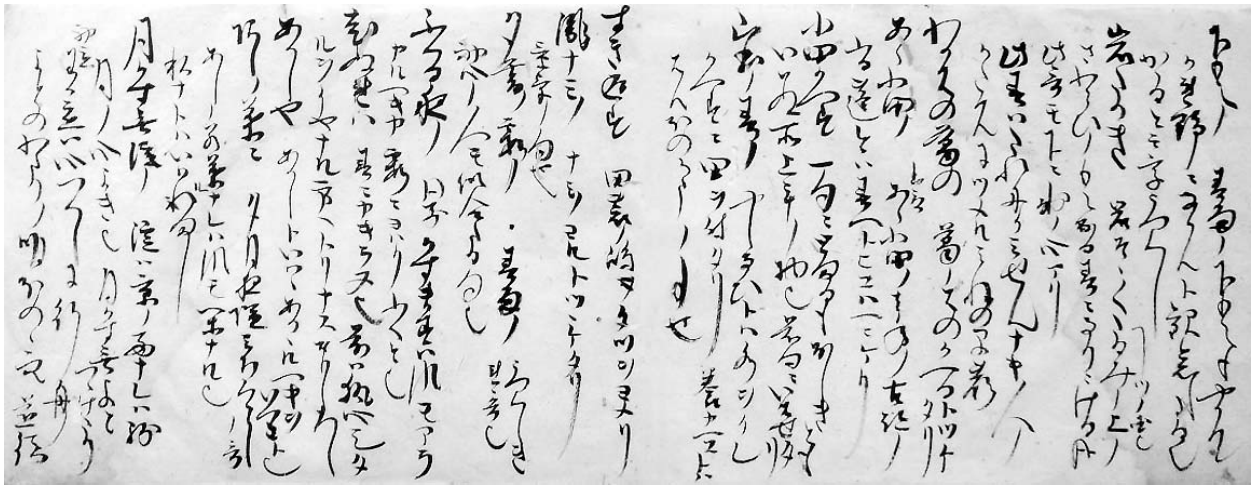
連歌師の猪苗代長珊自筆本。書写識語「永禄三年（1560）無射上澣書写校合畢」。巻末の遊紙に古筆了左（自筆）の極め書あり、「這一冊者連歌師兼与法橋曾祖父長珊真蹟無紛之者也／寛永十四（1637）暦林鐘中旬／古筆了左（黒印）（花押）」。

②『伊勢物語抄』　　写本　半紙本横本１冊（神宮皇学館文庫　913.32/I）



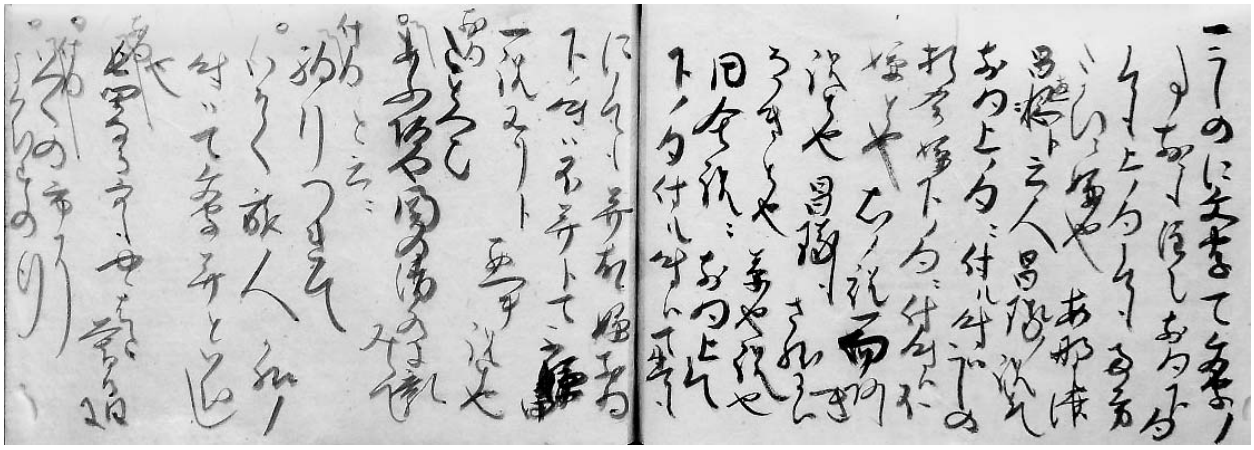
猪苗代兼如による伊勢物語注釈書。書写許可奥書「此伊勢物語抄者父兼如雖為秘本深依御懇望許書写者也／寛永九（1632）仲冬念三　看松斎兼与（花押）」（兼如の子、猪苗代兼与自筆。同人は同年12月23日没）。猪苗代兼如旧蔵本の寛永９年転写本。

③『竹聞』　写本　中本横本列帖装１帖（神宮皇学館文庫　911.204/Ti）



連歌論書。『竹林抄』の古注釈書。著名な連歌師、猪苗代兼載が会津で講義した際の聞書の原写本。奥書「文亀三年七月十五日酉刻於会津黒川聴聞終了／天」。文亀３年（1503）の写本。

④『新式目』　　写本　中本横本１冊（神宮皇学館文庫　911.207/R）



連歌に関する聞書雑記。記事詳細で豊富、詞に関する説明が多い。江戸時代初期、寛永頃能筆の原写本。書中「壬申八月十日より講始ル」とあり、寛永９年（1632）か。「安野津昌恵ト云人」等の地名見え、伊勢辺で出来た本らしい。

３）古文書は語る

古筆切（こひつぎれ）や茶掛けの存在を見てもわかるように、日本には古人の残した筆蹟をむやみに珍重するという不思議なメンタリティがあるが、悪いことではない。たしかに、手紙や文書は、その時々の用途のために構えることなく書かれただけに、その時代や人、人間関係のあり方がそこからあぶり出されてくる。特に遠隔地間でやりとりされた手紙は、一般に内容が詳細で、より多くを語ってくれる。その意味からも、空間的に広がりのある活動をした伊勢の御師たちの資料は面白い。

【１】戦国時代の武将と伊勢の御師

名古屋大学神宮皇学館文庫所蔵、来田家旧蔵「朝倉家関係文書」（288.3/A）より。伊勢御師西村家へ宛てた越前朝倉家関係者の書状６通（原本）。

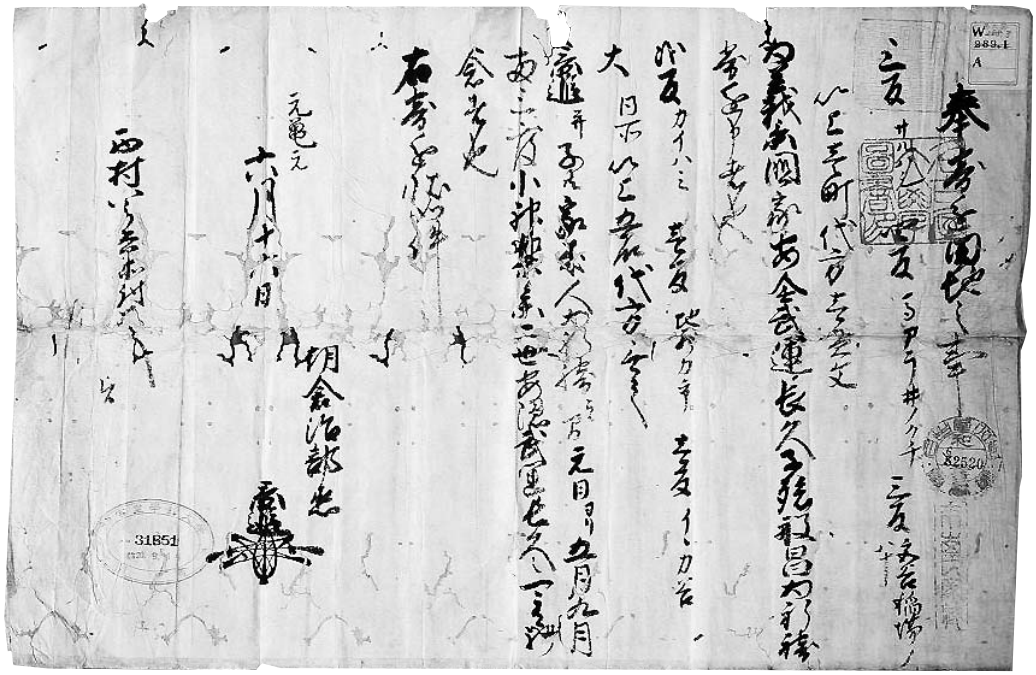
①元亀４年（1573）10月３日付　にしむら八郎ひやうへ宛、太ひやうへうち（女筆）書状。

折紙（29.9×45.9㎝）。この一包み数十三（銀塊か）を預けるので、将来この割り符を持った者に渡してもらいたいこと、「とらもし」は８月より煩い年を寄られたが、「うひゃうへ」「ちふさへもん」の「おとゝい」がいるので、２人の中より取りに行くこと、等を記す。

②３月16日付　にしむら八郎兵衛宛、三輪右兵衛書状。

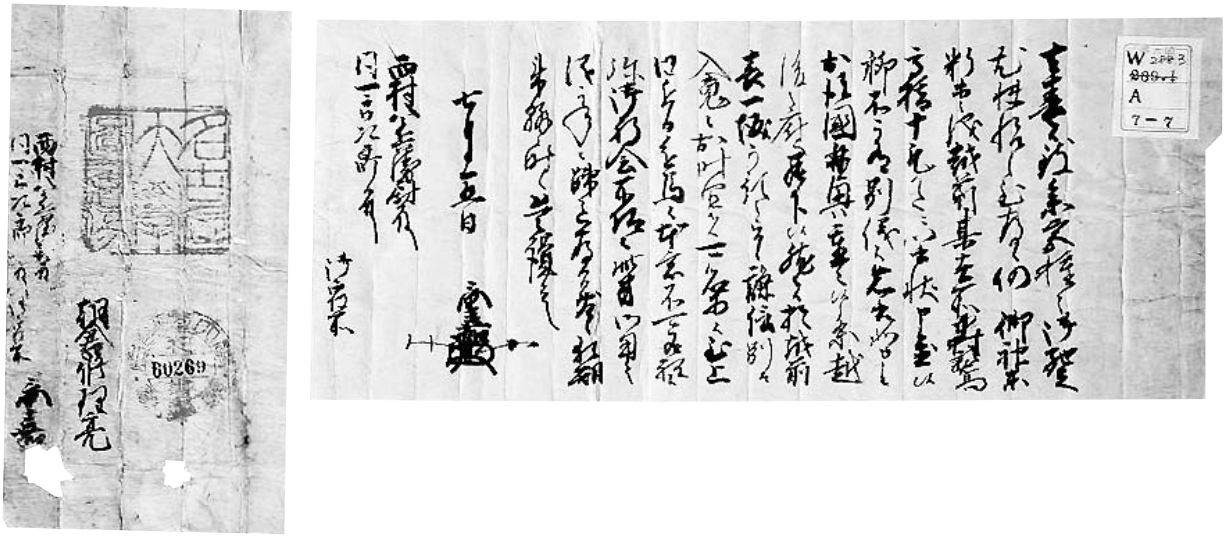
折紙（30.4×45.9㎝）。一昨年預けた物を使の者へ渡すよう依頼。①と②の書状は、戦乱時に伊勢の御師があたかもスイスの銀行の如く、財産の秘匿先としての機能を果たしていたことを思わせる。

③元亀元年(1570) 6月16日付　西村八郎兵衛尉宛、朝倉治部丞景遐（花押）寄進状。



朝倉義景一族の武運長久を祈願した寄進状。本文全文「奉寄進田地之事／三反〈サルハシ〉　四反〈馬アラ井ノクチ〉　三反〈宮谷稲場ノ八十〉／以上壱町代方壱貫文／為義景国家安全武運長久子孫般昌為祈祷寄進申者也／弐反〈カイハミ〉　壱反〈地蔵カ市〉　壱反〈イヽカ谷〉／大〈同所〉　以上五石代方無之／景遐并子共家来人為祈祷ニ候間元日ヨリ五月九月両三度小神楽参二世安穏武運長久之可有祈念者也／右寄進状如件」。竪紙(29×44㎝)。

④7月5日付　西村八郎兵衛尉・同一郎次郎宛、朝倉修理亮景嘉（花押）書状。



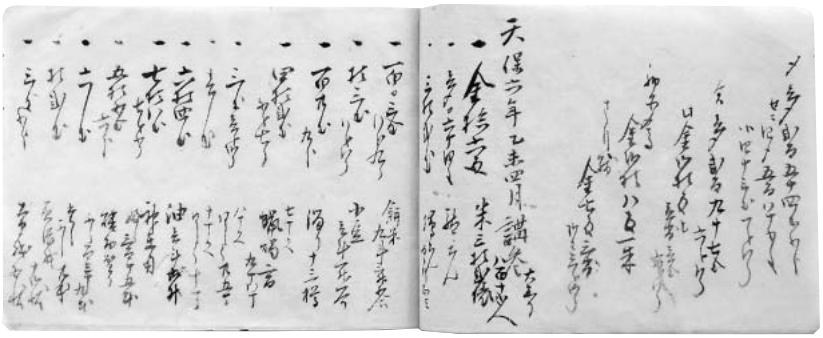
「…先書如申候於彼国再興遅々候之条越後之府へ罷下候然者於越前表一城可預之旨候謙信別而入魂候於時宜者可御心安候至上□近日進馬候本意不可有程候弥御祈念所仰候…」とある書状。切り封の跡ある巻紙（12×28.3㎝）、元の包紙（16.5×8.9㎝）を付す。いかにも戦乱の時代の伝達を思わせる小巻紙の書状。

⑤元亀３年（1572）12月18日　天照大神八郎夫宛、景政書状。

⑥元亀３年（1572）12月18日　天照大神八郎夫宛、景政書状。

折紙⑤（29×40.8㎝）⑥（28×40.9㎝）。題⑤「進上申下（外）宮御くう之事」⑥「進上申内宮御くう之事」。27歳の景政による、年々の「はつらいへいゆう」（煩い平癒）においては１石５斗を永代進上する旨の祈念依頼状。伊勢の外宮と内宮宛。神を相手に、やや契約的な文言である点が面白い。

⑦（参考出品）御師の勘定帳『納所勘定帳』　写本　中本横帳綴２冊（神宮皇学館文庫　175.8/N）



御師の大主織部が参宮人の接待の収支を記した帳面。天保・弘化年間のもの。天保６年（1835）４月の分には「大参り／八百十弐人」とあり、「金拾六両　米三拾弐俵」「百八拾五匁八分一厘　八百甚青物代」「金六拾六両八匁四分九厘　うをや太郎右衛門」以下大量の食料品等の買い物をしている。伊勢の御師が大人数の参詣人を切り盛りする様子は、西鶴の『西鶴織留』巻４の３に活写されている。

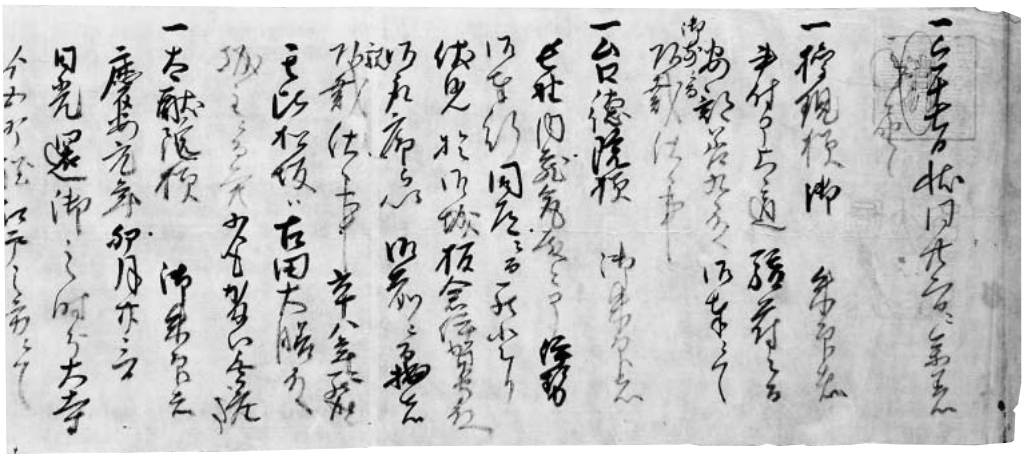
⑧（参考出品）御師の宿の献立帳『大々御神楽献立帳』　大本仮綴１冊（神宮皇学館文庫　385.2/D）

文政13年（1830）閏３月、某御師が参宮人に供した料理の献立。２日目の夕飯は三ノ膳まで付いた本格的なもの。御師の宿の食事は格安なことで有名であった。

【2】伊勢の特権商人、角屋家

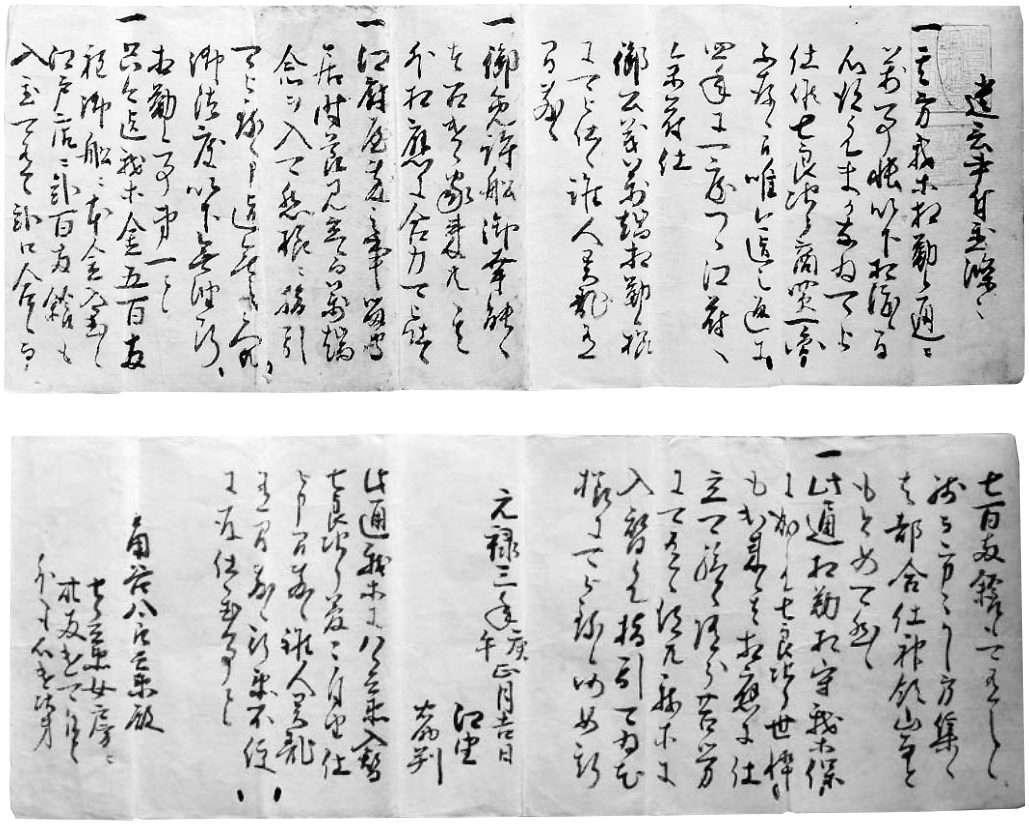
名古屋大学神宮皇学館文庫所蔵「角屋家文書」（288.3/Ka）より。角屋家は伊勢大湊の廻船業者。天正10年（1582）の本能寺の変の際、たまたま堺に滞在中の家康は急遽、伊賀路を越えて帰国しようとしたが、土一揆に阻まれた。角屋がその窮地を救い、柴船にかくまい、伊勢白子より尾張常滑まで家康を送り届けた。その功により、代々の将軍より諸国諸湊への出入りの諸役を免許される朱印状を下付された。

①近世前期、５月23日付　角屋七郎二郎・同八郎兵衛宛、同江由（３代七郎次郎忠祐）書状（控えか）。



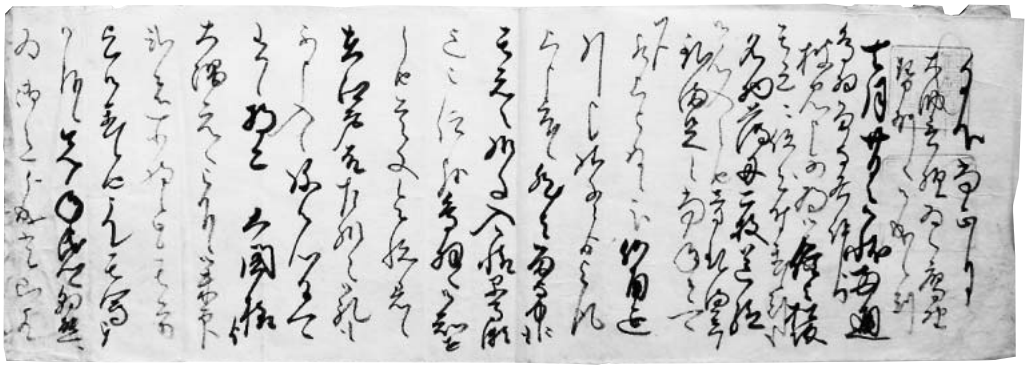
巻紙（16.7×151㎝）。在江戸の角屋七郎二郎らに対し、権現様・台徳院様・太猷院様・厳有院様の代々より御朱印を頂戴した際の次第を書き上げる。特に太猷院（家光）に直訴の一件は本人の体験に基づくもので詳細。

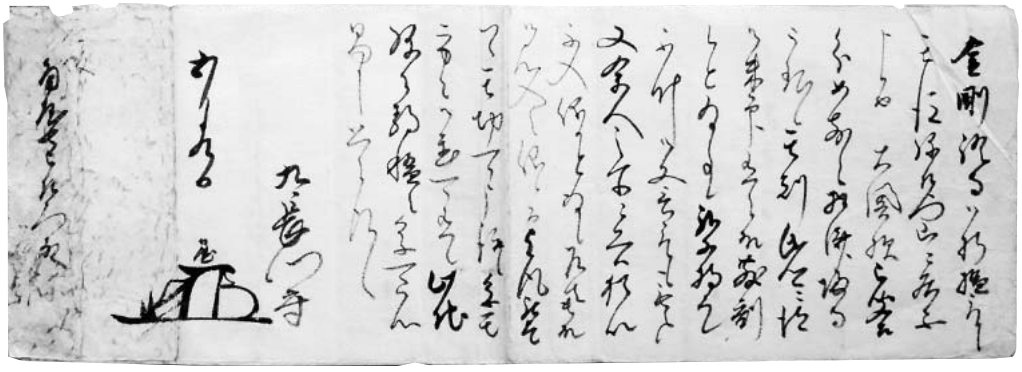
②元禄３年（1690）正月吉日付　角屋八郎兵衛宛、江由忠助遺言状（写し）。



折紙（34×46.2㎝）。万事帳以下相渡すこと、今まで通り４年に１度ずつ江戸へ参府して御公儀万端勤めるべきこと、都合700両余を残すこと、等。

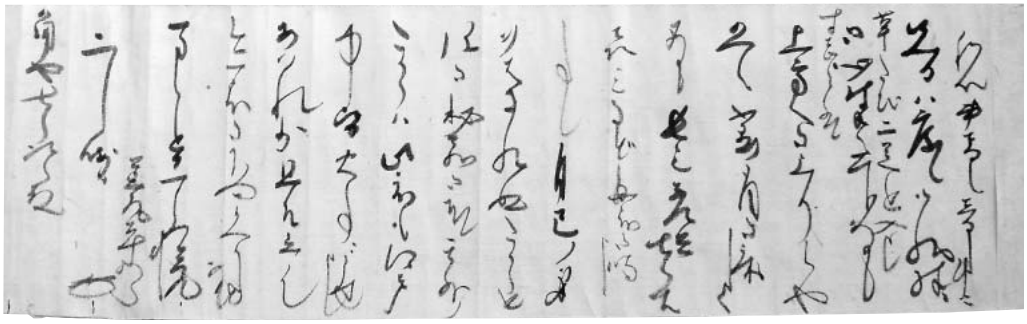
③近世初期、５月９日付　角屋七郎左衛門宛、九長門守守隆書状（写し）。





折紙（33.8×48.4㎝）。九鬼守隆（鳥羽城主。寛永９年（1632）没）の書状。早い時代の写し。所々に写し崩れ（転写時に生ずる運筆ミス）が見られる。

④近世前期、２月晦日付　角や七郎次郎宛、荒尾平八郎書状。



巻紙（15.5×50.1㎝）。荒尾平八郎久成（幕臣。延宝２年（1674）没、73歳）の書状。書中に「自己ノ身ヲはなれぬたからを弥御秘蔵御尤候其外ノたからハ此度も江戸中皆火事ニうせ申候」とあり。

メ　モ

実行委員

伊藤義人　名古屋大学附属図書館長（委員長）
内藤英雄　名古屋大学附属図書館事務部長
藤森末雄　同情報管理課長
臼井克巳　同情報サービス課長
郡司　久　同情報システム課長
伊藤哲谷　同情報管理課長補佐
髙橋律子　同情報サービス課専門員
薮本大明　同情報システム課専門員
大澤　剛　同情報管理課庶務掛長

ワーキンググループ

今枝文子（教育学部）、岡田智行（文学部）、髙橋律子（中央館）、堀友美（農学部）、眞野博和（農学部）、森由香（法学部）、米津友子（中央館）、渡邉通江（医学部）、岡本正貴（情報連携基盤センター）

展示会協力者：塩村　耕　文学研究科助教授

名古屋大学附属図書館企画展示

古書は語る

－館蔵の江戸文学資料を中心に－　図録ガイド

発　行　日　平成14年10月15日
編集・発行　名古屋大学附属図書館
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-3684　FAX : 052-789-3694
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp
印刷・製本　（株）荒川印刷
©名古屋大学附属図書館